

Q8 献血キャンペーンに効果的だと思う媒体

- ・ 「テレビ」が圧倒的に高い(84.7%)。次いで「インターネット」(46.8%)が続き、以下、「新聞」(23.7%)、「ポスター」(22.7%)、「雑誌」(22.7%)、「携帯電話」(22.2%)。
- ・ 職業別にみると、高校生では他層より「インターネット」(40.9%)がやや低く、「携帯電話」(28.0%)がやや高い。専業主婦・公務員で、「自治体の広報誌」を挙げる割合が他層よりも8~10ポイント高い。専業主婦は「新聞」(30.0%)「雑誌」(29.8%)も他層よりやや高い。
- ・ 性別では「雑誌」を挙げる人が男性(17.6%)よりも女性(27.9%)に多い。
- ・ 17年度調査と比較すると、「インターネット」「携帯電話」を効果的とする割合が高くなっている(インターネット41.9%→46.8%、携帯電話13.4%→22.2%)。

Q9 献血キャラクター「けんけつちゃん」認知

- ・ 未経験者全体での認知率は7.2%。
- ・ 属性別でみると、高校生、大学生・専門学校生の認知率が1割強と他層よりもやや高い。また男性(4.8%)よりも女性(9.7%)の認知率が上回っている。地域別では東北で他地域に比べやや高い(12.7%)。
- ・ 17年度調査と比較すると、認知率は3.0%→7.2%へと4ポイントアップした。
- ・ 属性別では、今回比較的認知率が高かった高校生、大学生・専門学校生、専業主婦において6~7ポイントの認知率アップがみられた。

Q10 献血キャンペーン認知

- ・ 献血キャンペーンを「知っている」と回答した人は14.7%。
- ・ 職業別では他層に比べて公務員の認知率(20.0%)がやや高い。性別では男性(11.6%)より女性(17.8%)が高く、地域別では東北(20.3%)がやや高い。
- ・ 17年度調査と比較すると、認知率は25.9%→14.7%へと相当低下している。
- ・ 属性別にみても、各層ともおしなべて認知率が相当低下している。

Q11 「HOP STEP JUMP」を配布された記憶

- ・ 高校3年生を対象に、「HOP STEP JUMP」という普及啓発資材が配布されていることを認知している人は9.6%。授業で使用した記憶がある人は2.2%にとどまっている。
- ・ 職業別にみると、高校生(15.0%)や大学生・専門学校生(10.30%)といった、より若い世代の認知率がやや高い。それでも認知率は10%台にとどまる。
- ・ 17年度調査と比較すると、認知率は7.1%→9.6%へと若干上昇している。

■ 感染症・血液製剤について

Q12 献血では感染症に感染しないことの認知

- ・ 献血でエイズ、肝炎といった感染症に感染しないことを認知している人は59.1%
- ・ 属性別による違いはさほどみられない。
- ・ 17年度調査と比較すると、認知率はほぼ横ばい(60.9%→59.1%)。
- ・ 職業別では、公務員の認知率が目立って低下している。

Q13 血液製剤の海外血液依存の認知

- ・ 血液製剤は未だ海外の血液に依存しているということを認知している人は14.5%
- ・ 職業別にみると、公務員の認知率が他層に比べてやや高い(21.2%)。性別・地域別による差はあまりみられない。
- ・ 17年度調査と比較すると、認知率は22.6%→14.5%へ、8ポイント低下。

■ 献血をしたことがない理由

Q15 献血したことがない理由(大きい順に3つ選択)

○ 1位に挙げた理由

- ・ 最も多かったのは「針を刺すのが痛くて嫌だから」(15.3%)。以下、「健康上出来ないと思ったから」(8.5%)、「なんとなく不安だから」(8.2%)、「近くに献血する場所や機会がなかったから」(7.8%)、「献血を申し込んだが、基準に適合せず断られた」(7.7%)が上位5。
- ・ 職業別にみると、専業主婦で「献血を申し込んだが、基準に適合せず断られた」が他層よりもやや高い(全体7.7%、専業主婦15.4%)。一方、高校生は「健康上出来ないと思ったから」がやや低い(全体8.5%、高校生2.4%)。
- ・ 17年度調査と比較すると、全体では「献血を申し込んだが、基準に適合せず断られた」(11.6%→7.7%)と「健康上出来ないと思ったから」(11.9%→8.5%)がやや減少している。
- ・ 地域別では、北海道で「針を刺すのが痛くて嫌だから」(10.5%→18.6%)と「献血する意志がない」(5.0%→10.5%)が前回よりも増加している。

○ 1位～3位累計

- ・ 1位～3位の累計でみると、「針を刺すのが痛くていやだから」(31.2%)と「なんとなく不安だから」(30.8%)が拮抗し、主な理由となっている。以下、「時間がかかりそうだから」(21.6%)、「恐怖心」(21.1%)、「近くに献血する場所や機会がなかったから」(19.9%)と続く。
- ・ 職業別にみると、高校生で「近くに献血する場所や機会がなかったから」がやや高い(全体19.9%、高校生25.9%)。公務員は他層に比べて「時間がかかりそうだから」(全体21.6%、公務員27.1%)と「忙しくて献血する時間がなかった」(全体14.7%、公務員21.2%)がやや高い。また、専業主婦では、1位の理由と同様に「献血を申し込んだが基準に適合せず断られた」(全体9.7%、専業主婦16.8%)が他層よりもやや高い。
- ・ 17年度調査と比較すると、全体では大きな変化はみられない。その中で「健康上出来ないと思ったから」が5ポイント低下した(22.8%→17.7%)。
- ・ 職業別では、公務員で「時間がかかりそうだから」(13.5%→27.1%)「忙しくて献血する時間がなかった」(14.4%→21.2%)が上昇している。
- ・ 高校生では、「どこで献血ができるかわからない」(15.1%→9.7%)は前回高かったが今回は他層並に低下し、「献血を申し込んだが、基準に適合せず断られた」(10.1%→4.8%)は前回他層並だったが、今回半減した。

■ 献血するきっかけとなり得る要因

Q16 献血するきっかけとなり得る要因(大きい順に3つ選択)

○ 1位に挙げた要因

- ・ 最も多かったのは「針を刺すときに痛みを和らげる処置が実施された」(12.1%)であった。献血をしたことがない理由でも「針を刺すのが痛くて嫌だから」が1位であったことから、「針を刺すときの痛さ」が献血への大きなネックとなっていることがうかがえる。
- ・ 以下、「家族や友人などから勧められた」(11.4%)、「献血しているところが入りやすい雰囲気になった」(8.6%)、「近くに献血する場所ができた(献血ルーム)」(7.1%)の順で続く。
- ・ 17年度調査と比較すると、全体では「献血しているところが入りやすい雰囲気になった」を挙げる割合が約9ポイント減少したのが目立つ。一方、「献血は絶対しない」を挙げる割合が増加している(12.5%→18.0%)。これは属性別にみても、各層共通である。

○ 1位～3位累計

- ・ 1位～3位累計でみると、「献血しているところが入りやすい雰囲気になった」が最も高く27.4%。「針を刺すときに痛みを和らげる処置が実施された」が25.7%で差のない2位。以下、「献血の重要性が明確になった」「家族や友人などから進められた」(各20.8%)、「献血が自分の健康管理に役に立つようになった」(20.1%)、「近くに献血する場所ができた(献血ルーム)」(18.7%)の順で続く。
- ・ 17年度調査と比較すると、「献血しているところが入りやすい雰囲気になった」「献血が自分の健康管理に役に立つようになった」が6ポイント減少しているが、それ以外はそれほど違いはみられない。

■ 家族・友人の献血状況

Q17 家族が献血している姿を見たことがあるか (新規質問)

- ・ 家族が献血している姿を見たことが「ある」という人は10.6%。
- ・ 職業別では、「ある」の割合は高校生(15.5%)、専業主婦(15.4%)でやや高く、性別では男性(7.4%)よりも女性(13.9%)の方が高い。

Q18 友人に献血している人がいるか (新規質問)

- ・ 「友達に献血をしている人はいますか」と質問したところ、「いる」は33.4%、「いない」が34.1%、「わからない」が32.5%と大きく3分された。
- ・ 「いる」の割合が高いのは公務員(48.2%)、大学生・専門学校生(40.3%)。
- ・ 高校生のほぼ半数(48.4%)が「いない」としており、他層と比べ目立って高い。
- ・ 性別では、女性の「いる」(38.7%)が男性を10ポイント上回っている。
- ・ 地域別では、北海道(41.4%)、東北(39.7%)が他地域よりもやや高い。

■ 献血に関する資料評価

(献血に関する資料の閲読後に、献血に関する意識の変化を質問。)

Q19-1 献血の必要性への理解が良くなったか

- ・ 「はい」は34.0%で、「どちらかというとはい」(57.8%)まで含めると91.7%にのぼる。否定的な意見は8.3%にとどまった。
- ・ 職業別では、肯定的な評価は特に専業主婦で高い(95.3%)。「はい」(43.7%)で他層との差が大きい。一方、自営業で好意的な評価はやや低い(86.6%)。
- ・ 17年度調査と比較すると、全体では肯定的な意見が87.7%→91.7%へと高くなっている。

Q19-2 献血に協力する意識の有無

- ・ 閲読後に「今は献血に協力する気持ち」が「ある」と回答した人は16.4%、「どちらかというところ」(48.8%)まで含めると65.2%。ほぼ3人に2人が協力の意向を示している。
- ・ 17年度調査と比較すると、全体のポジティブ評価に変化はみられない(65.0%→65.2%)。

Q19-3 今後実際に献血に行くか

- ・ 「はい」は6.1%。「どちらかというとはい」(41.3%)まで含めた前向きな意向はほぼ半数の47.4%。
- ・ 前向きな意向が最も高いのは高校生(52.2%、うち「はい」は8.8%)。自営業は41.8%(うち「はい」は2.2%)とやや低い。
- ・ 平成17年度調査との比較では、全体の前向きな意向は49.5%→47.4%。(自営業で13ポイントの低下)

2 献血経験者

■ 対象者特性 (回答者5,000人)

- ① 【居住地】は、「関東甲信越」が36.5%を占めており、以下、「近畿」(16.3%)「東海北陸」(15.6%)、「九州・沖縄」(11.7%)、「中国・四国」(8.6%)、「東北」(7.1%)、「北海道」(4.2%)の順。全体構成は17年度調査と概ね変わらない。
- ② 【性別】は、「男性」51.1%、「女性」48.9%とほぼ半々。17年度調査との比較では、男性回答者が大幅に増えている(34.1%→51.1%)。
- ③ 【年齢】は、16～17歳(2.5%)、18～19歳(8.7%)、20～24歳(48.7%)、25～29歳(40.0%)であった。20代が88.7%を占めるが、17年度調査に比べて10代の回答者が増加している(「16～17歳」(0.9%→2.5%)、「18～19歳」(2.9%→8.7%)。
- ④ 【職業】では、最も多かったのは「会社員」(43.0%)で、以下、「大学生・専門学校生」(29.1%)、「その他」(9.1%)、「専業主婦」(9.0%)、「公務員」(4.1%)、「高校生」(3.6%)、「自営業」(2.1%)の順。17年度調査と比較すると、「大学生・専門学校生」(13.0%→29.1%)が大幅増、「専業主婦」(21.3%→9.0%)の減少が目立つ。
- ⑤ 【医療関係への関与有無】については、「携わっている」と回答した人は11.0%で、17年度調査(10.0%)とほぼ同様だった。

■ 献血に関する認知状況

Q1 献血が病気の治療に役立っていることの認知 (新規質問)

- ・ 献血がさまざまな病気の治療に役立っていることは、献血経験者のほぼ3人に2人(65.9%)が認知している。
- ・ 職業別にみると、公務員の認知率(75.8%)が高く、専業主婦(58.7%)がやや低い。また、男女間で認知率に差はみられない。

Q2 若年層の献血協力者の減少傾向認知 (新規質問)

- ・ 近年、献血に協力してくれる10代・20代の若年層が大幅に減少していることを「知っている」という人は全体で55.3%。
- ・ 職業別にみると、公務員の認知率(60.4%)が他層に比べてやや高いが他はあまり変わらない。
- ・ 認知率は男女間で差はなく、地域別では、東北(62.8%)と中国・四国(61.5%)の認知率がやや高い。

■ 献血の広報・キャンペーンへの認知接触状況

Q3 献血に関する広報接触媒体

- ・ 接触したことがある広報媒体をみると、「街頭での呼びかけ」(68.0%)、「献血ルーム前の看板・表示」(65.5%)がともに2/3程度を占めており双璧。以下、「献血バス」(57.6%)、「テレビ」(55.4%)で、以上が主要な媒体。
- ・ 職業別にみると、「街頭での呼びかけ」「献血ルーム前の看板・表示」「献血バス」といった現場での接触は専業主婦で高い(順に74.3%、71.0%、63.4%)。逆に、高校生(順に49.2%、51.4%、39.8%)ではこうした現場での接触率が低い。

- ・ 地域別では、「街頭での呼びかけ」は北海道(56.2%)、中国・四国(59.6%)でやや低い。一方、関東甲信越は他地域に比べて「テレビ」(46.6%)がやや低い。
- ・ 17年度調査と比較すると、新規回答肢を除くと、各媒体との接触率は総じて低下している。特に「ポスターの掲示」が20ポイント近く下がったのが目立つ。

Q4 献血キャンペーンに効果的だと思う媒体

- ・ 「テレビ」が圧倒的に高い(83.6%)。次いで「インターネット」(48.3%)が続き、以下、「ポスター」(26.7%)、「雑誌」(26.3%)、「新聞」(25.8%)、「携帯電話」(25.6%)、「自治体の広報誌」(13.4%)、「FM放送」(11.9%)、「その他のラジオ放送」(7.6%)と続く。
- ・ 職業別にみると、各層とも「テレビ」「インターネット」中心は変わらない。その中で高校生では他層より「インターネット」(37.0%)がやや低い。また、「ポスター」は自営業(32.1%)と専業主婦(31.9%)でやや高く、他に、自営業で「FM放送」(17.9%)、専業主婦で「雑誌」(31.5%)、公務員で「自治体の広報誌」がやや高い。
- ・ 性別では、「雑誌」を挙げる人は男性(20.1%)よりも女性(32.8%)に多い。
- ・ 地域別では、他地域に比べて東北で「自治体の広報誌」(20.6%)がやや高い。
- ・ 17年度調査と比較すると、「テレビ」(△3.9%)「新聞」(△4.6%)がやや減少。一方で「インターネット」と「携帯電話」を挙げる割合が高くなっている(インターネット43.9%→48.3%、携帯電話14.9%→25.6%)。

Q5 献血キャラクター「けんけつちゃん」認知

- ・ 経験者全体での認知率は23.8%。ほぼ4人に1人が認知。
- ・ 職業別でみると、高校生の認知率(34.8%)が特に高く、大学生・専門学校生(31.8%)、公務員(29.5%)がこれに続く。一方、専業主婦の認知率が12.7%と他層よりも低い。
- ・ 性別では女性の認知率(28.8%)が男性(18.9%)よりも高く、地域別では東北(31.0%)が最も高い。
- ・ 17年度調査と比較すると、認知率は7.0%→23.8%へと大幅に上昇した。
- ・ 属性別でも、各層共通して認知率が上昇。特に大学生・専門学校生(8.1%→31.8%)と女性(7.2%→28.8%)で上昇が顕著。

Q6 献血キャンペーン認知

- ・ 献血キャンペーンを「知っている」と回答した人は36.5%。
- ・ 職業別では他層に比べて公務員の認知率(44.9%)がやや高い。性別では男性(30.9%)より女性(42.3%)が高く、地域別では東北(43.7%)でやや高く、北海道(27.1%)で最も低い。
- ・ 17年度調査と比較すると、認知率は46.4%→36.5%へと相当低下している。
- ・ 属性別にみても、各層ともおしなべて認知率が相当低下している。

Q7 「HOP STEP JUMP」を配布された記憶

- ・ 高校3年生を対象に、「HOP STEP JUMP」という普及啓発資材が配布されていることを認知している人は14.7%。授業で使用した記憶がある人は5.7%にとどまっている。
- ・ 職業別にみると、高校生の認知率は31.5%で、大学生・専門学校生は20.9%と、より若い世代の認知率が他層より高い。
- ・ 17年度調査と比較すると、認知率は10.6%→14.7%へと若干上昇している。

■ 感染症・血液製剤について

Q8 献血では感染症に感染しないことの認知

- ・ 献血でエイズ、肝炎といった感染症に感染しないことは、献血経験者のほぼ8割(78.4%)が認知している。
- ・ 17年度調査と比較すると、認知率はほぼ横ばい(79.9%→78.4%)。
- ・ 職業別では、公務員(88.2%→81.6%)、自営業(83.9%→74.5%)の認知率がやや低下している。地域別では、北海道でやや低下(84.5%→79.0%)。

Q9 血液製剤の海外血液依存の認知

- ・ 血液製剤は未だ海外の血液に依存しているということを認知している人は25.3%と、献血経験者の4人に1人の割合。
- ・ 職業別にみると、高校生の認知率(32.0%)が最も高く、唯一30%超。性別・地域別による差はあまりみられない。
- ・ 17年度調査と比較すると、認知率は30.8%→25.3%へ、約6ポイント低下。

■ 献血ルームのイメージ

(献血ルームに対するイメージについて、4つの項目で質問)

Q10-1 ルームの雰囲気について

- ・ 「明るい」が34.7%を占め、「暗い」の7.7%を大きく上回っている。ただし、全体的には「ふつう」の評価が51.7%を占める。
- ・ 職業別でみると、「明るい」と評価するのは公務員(42.0%)で最も高く、高校生(29.3%)は他層よりも低い。
- ・ 性別では、「明るい」と評価する割合は男性(29.9%)よりも女性(39.7%)が高い。
- ・ 17年度調査と比較すると、前回「わからない」の回答肢がなかったため、一概に比較できないが、「明るい」と評価する割合は42.1%→34.7%と低下している。低下が顕著なのは大学生・専門学校生(51.1%→37.8%)及び高校生(39.1%→29.3%)。

Q10-2 ルームの広さについて

- ・ 「広い」の20.4%に対して、「狭い」が24.5%と、狭いイメージの方が若干上回っている。ただし、全体的には「ふつう」と評価する人が48.1%を占めている。
- ・ 職業別でみると、「広い」と評価するのは公務員(26.6%)で最も高い。一方、自営業で「狭い」とする割合(32.1%)が他層より高く、「広い」(21.7%)を10ポイント上回っている。
- ・ 性別では、男性で「狭い」のスコア(27.7%)が「広い」(17.6%)を10ポイント上回り、女性に比べて「狭い」が高い(女性は「広い」23.3%、「狭い」21.1%)。
- ・ 17年度調査と比較すると、前回「わからない」の回答肢がなかったため、一概には比較できないが、全体では「広い」「狭い」とも概ね変動はない。

Q10-3 職員の対応について

- ・ 「良い」がほぼ半数の47.2%を占めている。また、「ふつう」も44.0%で、職員に対する評価は概ね良好。「悪い」とする人は少ない(3.3%)。
- ・ 職業別では、特に高校生で「良い」と評価する割合が最も高い(53.0%)。
- ・ 17年度調査と比較すると、前回「わからない」の回答肢がなかったため、一概には比較できないが、全体では「良い」が37.8%→47.2%に上昇。「ふつう」が57.5%→44.0%に低下している。

Q10-4 記念品や軽い飲食物について

- ・ 「良い」40.9%に対し、「悪い」は9.9%となっており、好意的な評価が大きく上回る。「ふつう」は44.4%。
- ・ 性別では、女性の「良い」(44.3%)が男性の「良い」(37.6%)を上回る。
- ・ 地域別では北海道で「良い」とする割合(49.0%)目立って高い。
- ・ 17年度調査と比較すると、前回「わからない」の回答肢がなかったため、一概には比較できないが、全体では「良い」が36.7%→40.9%と若干上昇。一方で「ふつう」が51.5%→44.3%に減少。「悪い」は11.8%→9.9%と若干減少した。
- ・ 地域別では、北海道、中国・四国で「良い」が10ポイント近く上昇。

■ 初めての献血について

Q12 初めての献血した年齢

- ・ 「18～19歳」(33.4%)と「20～24歳」(32.3%)が拮抗。次いで「16～17歳」(28.6%)。10代での初回献血経験者が全体の6割強を占めている。
- ・ 職業別では、当然のことながら高校生では「16～17歳」が87.3%を占め主流。大学生・専門学校生では「18～19歳」が40.4%で最も多い。一方、会社員、公務員では「16～17歳」が他層よりも低く(会社員23.0%、公務員22.2%)、「20～24歳」が最も多くなる(会社員37.2%、公務員38.6%)。
- ・ 女性の初献血年齢が男性に比べて総じて若い。特に「16～17歳」では女性32.2%、男性25.2%と7ポイント上回っている。
- ・ 地域別では、東北の「16～17歳」の割合(38.0%)が他地域よりやや高い。
- ・ 17年度調査と比較すると、「16～17歳」が34.6%→28.6%と6ポイント減少している。一方で「18～19歳」(30.6%→33.4%)及び「20～24歳」(27.9%→32.3%)は若干の増加傾向。

Q13 初めての献血した場所

- ・ 初めての献血した場所は、「献血ルーム」(32.8%)が最も多い。以下、「大学キャンパス又は専門学校・各種学校」(21.2%)、「(学校・職場以外の)献血バス」(21.0%)が同程度、「高校」(18.0%)の順で続く。
- ・ 職業別で見ると、高校生は「高校(での集団献血)」が38.1%と最も多い。それ以外は「献血ルーム」中心となっている。また、自営業、専業主婦は他層に比べ「(学校・職場以外の)献血バス」も比較的多い(自営業26.4%、専業主婦26.1%)。一方、大学生・専門学校生は「大学キャンパス又は専門学校・各種学校」(30.0%)と「献血ルーム」(32.4%)がほぼ同程度。
- ・ 性別では、女性の「献血ルーム」利用率(40.9%)が男性(25.1%)を大きく上回っている。
- ・ 地域別では、近畿で「(学校・職場以外の)献血バス」(29.0%)が他地域に比べてやや高くなっている。
- ・ 17年度調査との比較では、「献血バス」の割合が大きく減少しているが、前回、「大学キャンパス又は専門学校・各種学校」(多くは献血バスによると思われる)の回答肢がなかったため、一概には比較できない。
- ・ 高校生では、17年度調査と比べ、「高校(での集団献血)」を挙げる割合が16.1%→38.1%と大幅に増加し、「献血ルーム」を挙げる割合が48.3%→31.5%に減少している。ただ、17年度調査では、この年代の客体数が非常に少なかった(高校生は1.7%)ため、一概に比較できない。また、今回においても高校生は3.6%と構成要素として少ないことから、献血経験者全体では「高校(での集団献血)」は22.6%→18.0%に減少している(「高校」から「献血ルーム」へのシフトは、特に専業主婦と女性で顕著)。

Q14 初めての献血の種類

- ・ 「200 mL 献血」が51.6%と過半数を占めている。「400 mL 献血」は28.9%、「成分献血」は5.7%、「覚えていない」が13.8%。
- ・ 職業別でみると、高校生の69.6%が「200 mL 献血」。専業主婦も67.0%が「200 mL 献血」で中心となっている。一方、「400 mL 献血」は公務員で43.5%と最も高い。
- ・ 性別では、男性は「200 mL 献血」(39.5%)と「400 mL 献血」(39.6%)が同程度。女性では「200 mL 献血」の割合(64.2%)が「400 mL 献血」(17.8%)を圧倒している。
- ・ 17年度調査と比較すると、「200 mL 献血」が62.3%→51.6%と11ポイントの減少。「400 mL 献血」が18.9%→28.9%と10ポイントの増加。
- ・ 高校生を除く各層で「200 mL 献血」が減少し、「400 mL 献血」が増加した。高校生はほぼ前回並みの結果。

Q15 初めての献血で400 mL 献血することへの不安意識（新規質問）

- ・ 6割弱(57.2%)の人は「特に不安は感じない」としている。一方で、「不安」と回答した人は26.4%だった。
- ・ 職業別でみると、「特に不安は感じない」は公務員で多い(67.6%)。一方、専業主婦では、「特に不安は感じない」(43.3%)と「不安」(39.1%)が拮抗している。
なお、高校生でも56.4%は「特に不安は感じない」としているが、他層に比べ「わからない」が多い(全体16.4%、高校生23.8%)。
- ・ 性別では、女性の方が「不安」意識が高い(男性19.9%、女性33.2%)。

■ 献血回数について

Q16-1 過去1年間の200 mL 献血回数

- ・ 献血経験者のうち、過去1年間で200 mL 献血をした経験のある人は46.1%。
- ・ 献血した回数では、「1回」が27.4%で最も多く、「2回」が10.8%、「3回」が3.7%、「4回以上」が4.3%で続く。
- ・ 2回以上の複数回献血者は全体の2割弱(18.8%)となっている。
- ・ 職業別でみると、過去1年間の200 mL 献血経験者の割合が最も高いのは高校生で82.3%と圧倒的。その大半(75%)は「1回」である。大学生・専門学校生がこれに続き(50.2%)、そのうち63%は「1回」である。一方、公務員の200 mL 献血経験者は33.8%で他層に比べ低い。
- ・ 性別では、女性の200 mL 献血経験者(52.2%)が男性(40.3%)を上回る。
- ・ 地域別では、九州・沖縄の200 mL 献血経験者(35.7%)が他地域より低い。
- ・ 17年度調査と比較すると、全体では200 mL 献血経験率が40.5%→46.1%とやや増加している。ただ、高校生については前回に比べて約9ポイントの減となっている(90.8%→82.3%)。

Q16-2 過去1年間の400 mL 献血回数

- ・ 献血経験者のうち、過去1年間で400 mL 献血をした経験のある人は37.7%。
- ・ 献血した回数では、「1回」が22.1%で最も多く、「2回」が8.3%、「3回以上」が7.4%で続く。
- ・ 2回以上の複数回献血者は全体の15.7%であり、200 mL 献血(18.8%)に比べ若干低い。
- ・ 職業別でみると、200 mL 献血が圧倒的に多い高校生では400 mL 献血経験者の割合は14.9%と低く、専業主婦も17.4%と他層に比べ低い。一方、大学生・専門学校生(44.1%)と公務員(45.9%)は高く、特に公務員では2回以上の複数回献血者が25.2%(2回:9.7%、3回以上:15.5%)と高い。

- ・ 性別では、男性の400 mL 献血経験者(47.9%)が女性(27.0%)を上回る。
- ・ 地域別では、九州・沖縄の400 mL 献血経験者(43.7%)が他地域より高い。
- ・ 17年度調査と比較すると、全体では400 mL 献血経験率が26.4%→37.7%へと11ポイント増加。「3回以上」も3.4%→7.4%に増加している。
- ・ 職業別では、特に会社員と公務員で「3回以上」が増えているのが目立つ(会社員:3.7%→9.0%、公務員:5.9%→15.5%)。

Q16-3 過去1年間の成分献血回数

- ・ 献血経験者のうち、過去1年間で成分献血をした経験のある人は22.1%。
- ・ 献血した回数では、「1回」が11.0%で最も多い。
- ・ 2回以上の複数回献血者は全体の11.1%であり、「1回」と同程度。
- ・ 職業別で見ると、採血基準(18歳～)によりそもそも対象者が少ない高校生の成分献血経験率が6.1%と極端に少なく、専業主婦も16.3%と他層に比べ低い。一方、公務員の成分献血経験率は29.0%と他層に比べて高く、4回以上の複数回献血者も10.6%と高い。
- ・ 性別による差はほとんどみられない。
- ・ 地域別では、他地域に比べ北海道の成分献血経験率が13.8%と特に低い。
- ・ 17年度調査と比較すると、全体では成分献血経験率が18.8%→22.1%へと若干の増加。回数では「1回」が前回に比べ増加(7.7%→11.1%)している。
- ・ 職業別では、特に会社員と公務員で「3回以上」が増えているのが目立つ(会社員:3.7%→9.0%、公務員:5.9%→15.5%)。

Q17 今までの合計献血回数

- ・ 今までの通算献血回数をみると、「1回」が最も多く、33.7%と3人に1人の割合。残りの66.3%の人が複数回献血者であり、この中では「3～5回」(26.2%)が最も多く、次いで「2回」(18.7%)、「6～10回」(10.8%)、「11～20回」(6.2%)、「21～30回」(2.0%)、「それ以上」(2.4%)と続く。
全体では「2回以下」と「3回以上」がほぼ半数ずつとなっている。
- ・ 職業別にみると、高校生は(当然のことながら)献血回数が他層に比べて低く、「1回」が63.0%を占める。一方、会社員、公務員及び自営業で「3回以上」の割合がやや高い(会社員:54.0%、公務員:59.4%、自営業:55.7%、全体47.6%)
- ・ 17年度調査と比較すると、全体では複数回献血者が71.8%→66.3%へと減少している(各層共通)。

★関連質問とのクロス集計 ①「初めて献血した場所」(Q13)

初めて献血した場所	今までの合計献血回数						
	1回	2回	3-5回	6-10回	11-20回	21-30回	それ以上
高校	30.6%	21.5%	27.6%	10.4%	6.8%	1.6%	1.6%
大学キャンパス又は 専門学校・各種学校	36.1%	20.9%	28.6%	7.9%	3.9%	1.4%	1.2%
職場	36.7%	22.5%	27.9%	9.2%	1.4%	0.4%	1.3%

- ・ 「初めて献血した場所」ごとに通算献血回数をみると、大学や職場に比べて「高校で初めて献血した」層ほど、通算献血回数が多い傾向がみられる(6回以上で大きな差が現れる)。
- ・ より若いうちに献血を経験すると、その後の献血回数が増える傾向が強いとも考えられる。

★関連質問とのクロス集計 ②「家族の献血の有無」(Q20:後述)

家族が献血している 姿を見たことがあるか	今までの合計献血回数						
	1回	2回	3-5回	6-10回	11-20回	21-30回	それ以上
ある	24.2%	16.0%	28.4%	13.7%	10.3%	3.5%	4.0%
ない	35.9%	19.1%	25.8%	10.3%	5.3%	1.7%	1.9%
覚えていない	40.2%	22.8%	23.6%	7.1%	2.6%	1.3%	2.4%

- ・ 「家族が献血している姿を見たことがあるかどうか」と通算献血回数との関係を見ると、「見たことがある」と回答した層ほど、通算献血回数が多いことが明らか(3回以上で差が現れ、献血回数が多いほど差が広がる傾向)。
- ・ 「家族の献血現場を見たことがあるかどうか」とその後の献血行動との相関は高いことがうかがえる。

■ 献血するきっかけ

Q18 初めての献血のきっかけ(大きい順に3つ選択)

○ 1位に挙げたきっかけ

- ・ 最も多かったのは「自分の血液が役に立って欲しいから」が37.5%で突出傾向。以下、「なんとなく」(10.7%)、「輸血用の血液が不足していると聞いたから」(9.1%)、「家族や友人などに勧められたから」(7.2%)、「大学キャンパスに献血バス・出張献血が来たから」(6.6%)などが続く。
- ・ 職業別にみると、各層とも「自分の血液が役に立って欲しいから」が主要なきっかけとなっているが、特に、高校生(44.8%)、自営業(42.5%)、専業主婦(42.9%)でその意識が高い。
- ・ 平成17年度調査と比較すると、回答肢が多少入れ替わったため一概には比較できないが、「自分の血液が役に立って欲しいから」が最も大きなきっかけであることに変わりはなく、そのスコアは33.7%→37.5%と増加している。また、「なんとなく」は14.4%→10.7%に減少しており、特に高校生(23.0%→11.6%)、自営業(13.3%→7.5%)、専業主婦(12.7%→7.5%)で顕著に減少。

○ 1位～3位累計

- ・ 1位～3位の累計でも、「自分の血液が役に立って欲しいから」が圧倒的に高く、61.0%となっている。以下、「輸血用の血液が不足していると聞いたから」(39.1%)、「お菓子やジュースがもらえるから」(31.2%)、「自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから」(29.5%)、「なんとなく」(29.1%)の順。
- ・ 職業別にみると、各層とも「自分の血液が役に立って欲しいから」が主要なきっかけとなっているが、特に、高校生(62.4%)、自営業(65.1%)、専業主婦(69.4%)で顕著。
- ・ 新規回答肢の「献血は愛に根ざしたものだから」(15回答肢中11位:全体7.7%)は高校生(14.4%)、自営業(15.1%)が目立って高かった。
- ・ 17年度調査と比較すると、回答肢が多少入れ替わったため一概には比較できないが、「自分の血液が役に立って欲しいから」が最も大きなきっかけであることに変わりはなく、そのスコアは58.3%→61.0%と増加している。
- ・ 職業別では、「自分の血液が役に立って欲しいから」は、高校生(49.4%→62.4%)、自営業(55.2%→65.1%)、専業主婦(61.3%→69.4%)が目立って増加。
- ・ 他に、「将来自分や家族等が輸血を受けることがあるかもしれないから協力した」(10.8%→16.4%)、「覚えていない」(4.4%→12.1%)が増加し、「なんとなく」(34.5%→29.1%)が減少した(高校生の減少が顕著:43.7%→27.6%)。

Q19 現在献血するきっかけ(大きい順に3つ選択)

○ 1位に挙がったきっかけ

- ・ 初めての献血のきっかけと同様、「自分の血液が役に立って欲しいから」が45.3%と圧倒的に高い。以下、「輸血用の血液が不足していると聞いたから」(11.7%)、「自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから」(10.7%)と続く。
- ・ 17年度調査と比較すると、全体ではあまり変化はなく、「自分の血液が役に立って欲しいから」(前回43.9%→今回45.3%)が他を大きくリードしているという傾向も変わらない。
- ・ 職業別では、「自分の血液が役に立って欲しいから」は、初めての献血のきっかけと同様に、高校生(37.9%→48.6%)、自営業(46.9%→53.8%)、専業主婦(46.6%→54.7%)の増加が目立つ。
なお、高校生で「なんとなく」の減少が目立つ(23.0%→13.8%)。
- ・ 地域別では、北海道で「自分の血液が役に立って欲しいから」の減少が特に顕著(50.0%→37.1%)。

○ 1位～3位累計

- ・ 1位～3位の累計で見ると、「自分の血液が役に立って欲しいから」が70.4%と圧倒的に高く、最大要因となっている。以下、「輸血用の血液が不足していると聞いたから」(53.2%)、「自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから」(40.3%)、「お菓子やジュースがもらえるから」(36.8%)、「なんとなく」(32.5%)の順で続く。
- ・ 職業別にみると、各層とも「自分の血液が役に立って欲しいから」が主要なきっかけとなっているが、特に、自営業(75.5%)、専業主婦(76.1%)で高い。
また、高校生では「お菓子やジュースがもらえるから」(44.8%)が他層に比べてやや高い。
- ・ 新規回答肢の「献血は愛に根ざしたものだから」(11回答肢中8位:全体9.6%)は高校生(16.6%)、自営業(17.0%)で目立って高かった。
- ・ 17年度調査と比較すると、全体では「輸血用の血液が不足していると聞いたから」(47.6%→53.2%)「将来自分や家族等が輸血を受けることがあるかもしれないから協力した」(15.9%→27.3%)がやや増加した(各層共通)。
- ・ 職業別では、「自分の血液が役に立って欲しいから」は、高校生(54.0%→71.8%)、自営業(65.7%→75.5%)で目立って増加。一方、会社員、公務員では「なんとなく」がやや増加している(会社員28.5%→34.2%、公務員22.2%→29.0%)。

Q22 高校での集団献血がその後の献血への動機付けとなるか

- ・ 高校での集団献血がその後の献血の動機付けに有効かどうかについて、「非常に有効」と評価した人が36.4%を占める。また、「どちらかといえば有効」(48.2%)と合わせたポジティブ評価は84.6%にのぼる。
- ・ 職業別にみると、ポジティブ評価(有効計)は専業主婦が92.6%と最も高い。一方、自営業は78.3%と他層に比べやや低いが、「非常に有効」に限ると専業主婦とともに最も高い(ともに41.5%)。
- ・ 17年度調査と比較すると、全体ではポジティブ評価(有効計)が65.9%→84.6%と大幅に上昇した(「非常に有効」:20.4%→36.4%)。また、各層ともにポジティブ評価が上昇している。
- ・ 高校での献血は、その後の献血への動機付けになるとの意識は高くなっていることがうかがえる。

★関連質問とのクロス集計「初めて献血した場所」(Q13)

(初めて献血した場所)	非常に有効	どちらかといえは有効	あまり関係ない	全く関係ない	有効(計)	関係ない(計)
高校	44.9%	43.7%	8.9%	2.5%	88.6%	11.4%
大学キャンパス又は専門学校等	35.8%	49.8%	11.2%	3.2%	85.6%	14.4%
職場	41.7%	42.5%	12.9%	2.9%	84.2%	15.8%
献血バス(上記以外)	32.4%	52.4%	11.5%	3.7%	84.8%	15.2%
献血ルーム(血液センター)	35.0%	47.5%	13.7%	3.8%	82.6%	17.4%
覚えていない	20.6%	50.5%	12.1%	16.8%	71.0%	29.0%
計	36.4%	48.2%	11.7%	3.7%	84.6%	15.4%

- ・ 「高校での集団献血がその後の献血への動機付けとなるか」について、「初めて献血した場所」ごとに関連づけて集計をしたところ、高校や大学などで初めて献血したという層ほど、“より有効”とする傾向がみられた。
- ・ 特に、高校で初めて献血した層で「非常に有効」が高い割合。

■ 家族・友人の献血状況

Q20 家族が献血している姿を見たことがあるか (新規質問)

- ・ 家族が献血している姿を見たことが「ある」という人は21.8%。
→ 献血未経験者(10.6%)と比べると約2倍(各層ほぼ共通)。
- ・ 職業別にみると、専業主婦で「ある」が32.4%と他層に比べ高い。
- ・ 性別では、「ある」は男性(16.8%)に比べ女性(27.0%)が10ポイント上回る。

Q21 友人に献血をしている人がいるか (新規質問)

- ・ 献血経験者の6割(59.7%)が、友達に献血をしている人が「いる。」と回答。
→ 献血未経験者(33.4%)と比べると、ほぼ2倍。特に高校生で大きな差が生じている(高校生・献血未経験者:12.1%、同・献血経験者:56.9%)。
- ・ 職業別にみると、「いる」の割合が特に高いのは大学生・専門学校生(66.3%)と公務員(69.6%)。一方、自営業(47.2%)、専業主婦(54.5%)ではやや低い。
- ・ 性別では、「いる」の割合は男性(56.0%)に比べて女性(63.5%)が約8ポイント上回っている。
- ・ 地域別では、東北で「いる」が69.9%と他地域よりも多い。

■ 献血に関する資料評価

(献血に関する資料の閲読後に、献血に関する意識の変化を質問。)

Q23-1 献血の必要性への理解が良くなったか

- ・ 「はい」は32.7%で、「どちらかというとはい」(59.4%)まで含めると92.1%にのぼる。否定的な意見は7.9%にとどまった。
- ・ 職業別では、肯定的な評価は特に専業主婦で高い(95.3%)。「はい」(38.2%)で他層との差がやや大きい。
- ・ 17年度調査と比較すると、全体では肯定的な意見が87.9%→92.1%へと高くなっている。

Q23-2 献血に協力する意識の高まり

- ・ 閲読後に「献血に協力する気持ちは高まりましたか」との問いに「はい」と回答した人は31.3%。「どちらかというとはい」(56.6%)を含めたポジティブ評価ではほぼ

9割(87.9%)の人に協力意識の高まりがみられた。

- ・ 職業別にみると、専業主婦でポジティブ評価が特に高い(93.8%)。なお、「はい」に限ると高校生(36.5%)も専業主婦(37.1%)と遜色なく他層より高い。
- ・ 17年度調査と比較すると、全体のポジティブ評価は85.3%→87.9%と微増。「はい」については、各層共通で相当に増加(全体:19.3%→31.3%)。

Q23-3 献血回数を増やすか

- ・ 「はい」は28.5%。「どちらかというとはい」(54.4%)を含めたポジティブな意向は83.0%。資料閱讀後にはかなりの人が回数の増加を喚起されている。
- ・ 職業別でポジティブ評価が最も高いのは専業主婦(90.2%)。なお、「はい」に限ると、高校生(35.4%)は専業主婦をも凌いでおり、両層が他層よりも高い。
- ・ 平成17年度調査との比較では、全体のポジティブ評価は82.5%→83.0%とほぼ変わらず。

■ 献血についての要望・知りたいこと

Q11 献血について何か要望又は知りたいことがあるか

- ・ 最も多かったのは、「献血について正しい知識、必要性を知らせてほしい」で40.5%。以下、「職場や学校などで献血の機会を増やしてほしい」(38.5%)、「献血する場所、日時などについて十分知らせてほしい」(37.5%)、「献血したときの処遇品(記念品)をもっと良くしてほしい」(35.4%)などが僅差で続いており、突出したものは無いものの要望は多岐にわたっている。
- ・ 職業別では、専業主婦の「学校の授業で献血の重要性等について取り上げてほしい」(専業主婦:42.0%、全体:29.2%)が他層に比べて目立って高い。
- ・ 性別では、総じて男性より女性の要望が目立つ。特に「職場や学校などで献血の機会を増やしてほしい」(男性33.8%、女性43.4%)、「学校の授業で献血の重要性等について取り上げてほしい」(男性25.4%、女性33.1%)でその差が大きい。
- ・ 17年度調査と比較すると、全体的に大きな動きはみられないが、「献血したときの処遇品(記念品)をもっと良くしてほしい」がやや減少(42.0%→35.4%)。「献血について正しい知識、必要性を知らせてほしい」は高校生で増加(28.7%→35.4%)、「職場や学校などで献血の機会を増やしてほしい」は自営業(21.7%→30.2%)、専業主婦(31.0%→38.2%)で増加、「学校の授業で献血の重要性等について取り上げてほしい」は会社員(22.3%→28.1%)及び専業主婦(30.6%→42.0)で増加した。

●自由記載欄の主な回答

【献血未経験者】

Q16-1 献血するきっかけとなり得る要因

(「献血したときの処遇品(記念品)がよくなった」の具体例)

- ・ 図書券、商品券、クオカードなどの金券
- ・ お金
- ・ 食べ物、飲み物 他

Q16-2 献血するきっかけとなり得る要因

(「献血ルームのサービスが良くなった」の具体例)

- ・ 待ち時間のフリードリンク
- ・ 待ち時間の短縮
- ・ リラックスできる環境
- ・ マッサージ 他

Q16-3 「献血は絶対しない」を選んだ理由

- ・ 貧血(または貧血気味)
- ・ 血をとられるのがいやだ
- ・ 血を見るのがいやだ
- ・ 痛い、針を刺すのがいやだ、注射が苦手
- ・ 薬を飲んでいる
- ・ 時間がない、面倒 他

Q20 若い方の献血に協力する気持ちを高めるためには、どのようなことをすればよいか

- ・ タレント、アイドルをキャンペーンに起用する
- ・ テレビCM
- ・ インターネットや携帯電話で広告
- ・ 処遇品、記念品の充実や報酬
- ・ 献血できる場所を増やす
- ・ 献血の重要性をわかりやすく伝える
- ・ 学校での献血、献血バスを増やす
- ・ 学校での教育
- ・ 痛くない針などがあれば 他

【献血経験者】

Q15 初めての献血で400 mL 献血をすることが不安な理由

- ・ 貧血が心配、
 - ・ 倒れそう
 - ・ 量が多いと感じる
 - ・ 最初は少ない方がよい
 - ・ 以前に体調が悪くなった
 - ・ 不安
- 他

Q24 若い方の献血に協力する気持ちを高めるためには、どのようなことをすればよいか

- ・ 献血できる機会を増やす
 - ・ 学校での献血を増やす
 - ・ 高校での集団献血が効果的
 - ・ 献血をする場所・時間を教える
 - ・ インターネットでの広告
 - ・ 芸能人や若者に影響力のある人を起用したキャンペーン
 - ・ 処遇品、記念品の充実
 - ・ もっと献血の重要性をアピールする
 - ・ 若者の集まる場所でのPR活動
 - ・ 学校での教育
- 他

年齢別実献血者・人口分布グラフ及び年齢・施設別延べ献血者グラフ 【6都道府県抜粋】

1. 対象データ

● 抽出都道府県

大都市として「東京都」、「大阪府」。政令指定都市を有する「北海道」。大都市を有しない地方として「山形県」、「高知県」、「宮崎県」を抽出。

● 人口分布データ

平成17年国勢調査の結果を用い、2年分スライドして反映。

● 献血者数

平成19年の献血者実数を献血回数別に集計。ただし、年齢・施設別の献血者数は延べ人数で集計。

2. 全体としての傾向

● 16～17歳の実献血者数は概ねどの地域でも少ない。

● 大阪府以外では18～19歳に大きなピークがみられる。

● どの地域も20代の実献血者数とその前後の年代に比べ少なく、18～19歳のピーク後の20代の減少がみられる。

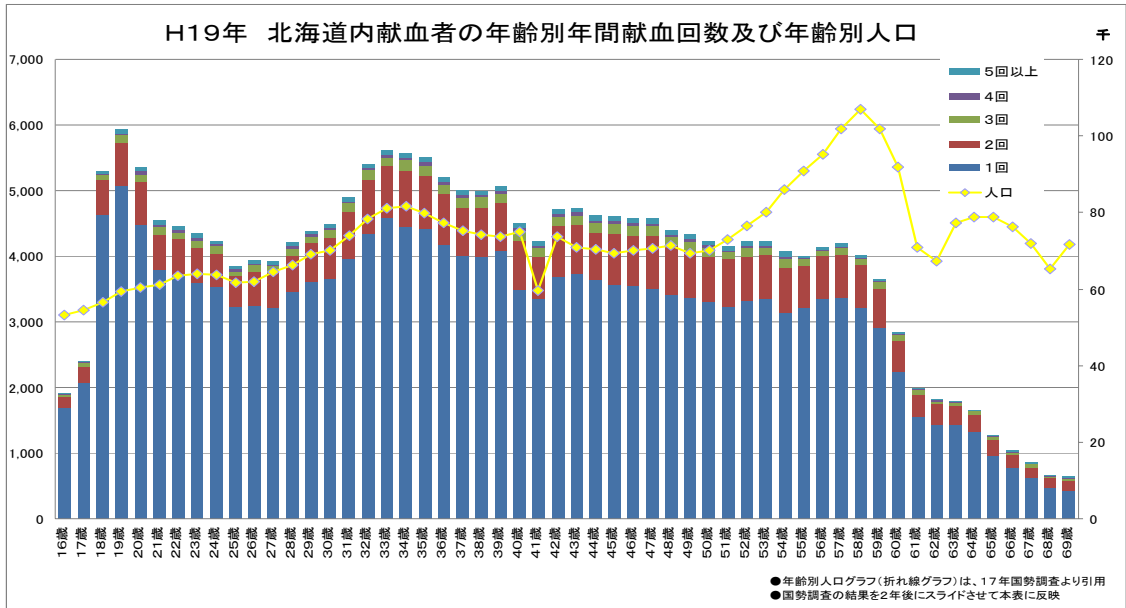
● どの地域においても30代前半の実献血者数が多い。

● 東京都では40歳以上の実献血者数が少ない。

● 年間複数回献血者の比率は、各年齢でばらつきはあるものの、地域間で大きな差はない。

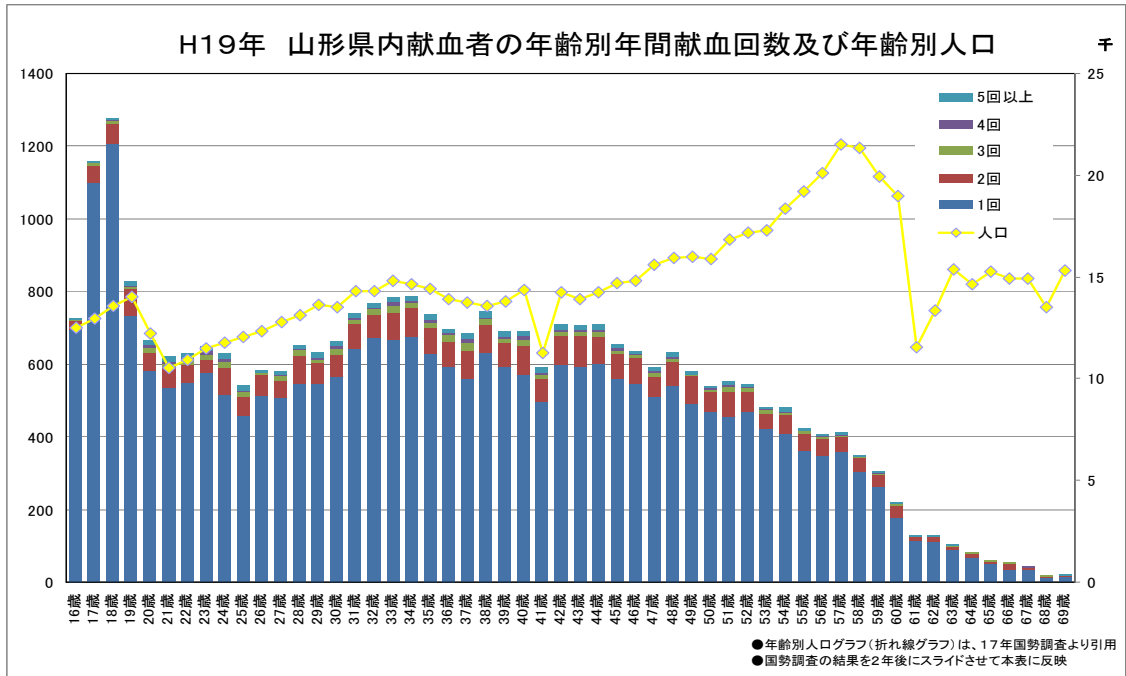
● 東京都以外では、全般に移動採血車による献血も相当ある。

年齢別実献血者・人口分布グラフ【6都道府県抜粋】



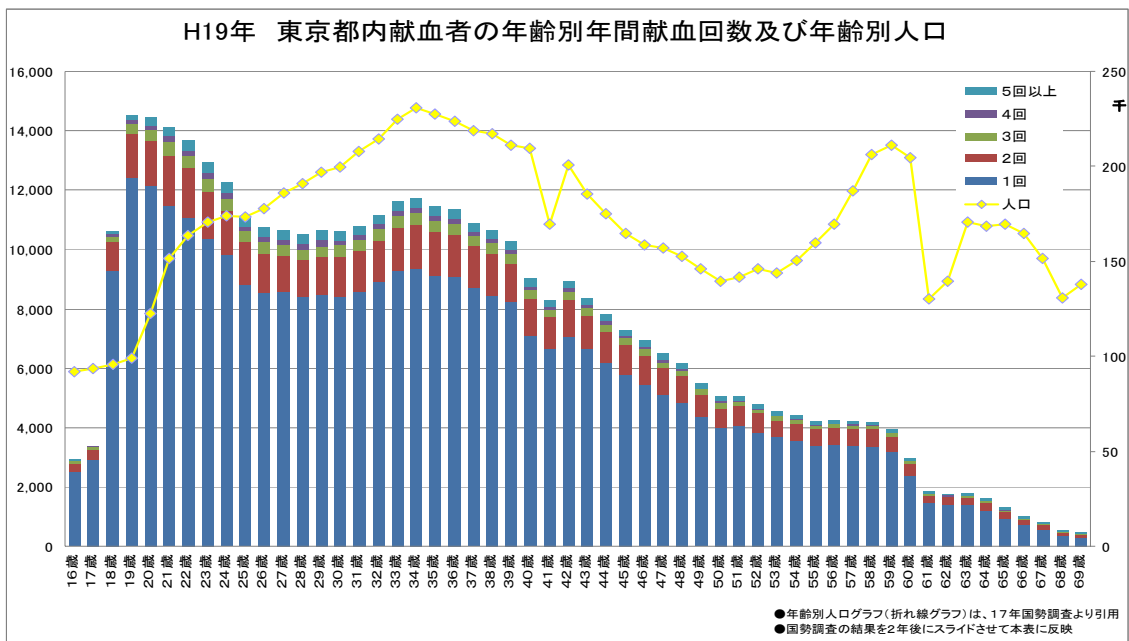
● 実献血者数分布と人口分布の比較

18～20歳の人口分布と比較すると献血者分布が多い。50～58歳の人口は上昇しているが、献血者の分布はほぼ平行。



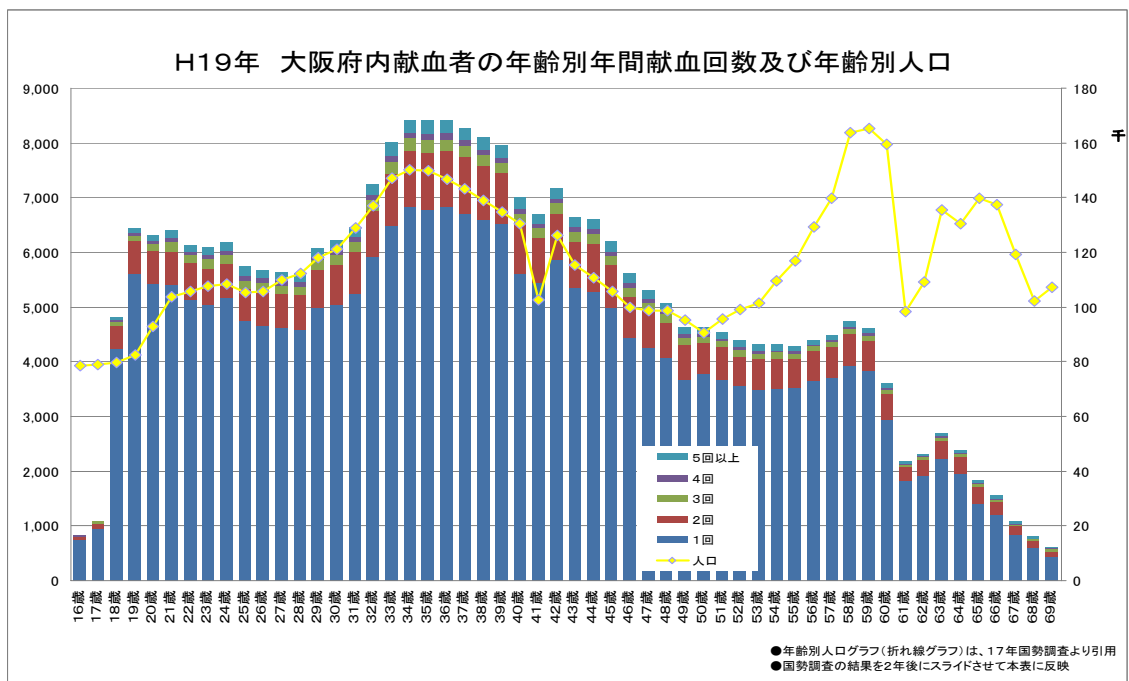
● 実献血者数分布と人口分布の比較

17、18歳の人口分布と比較すると献血者分布が多い。43～57歳までの人口分布は緩やかに増加しているが、献血者分布は緩やかに減少。



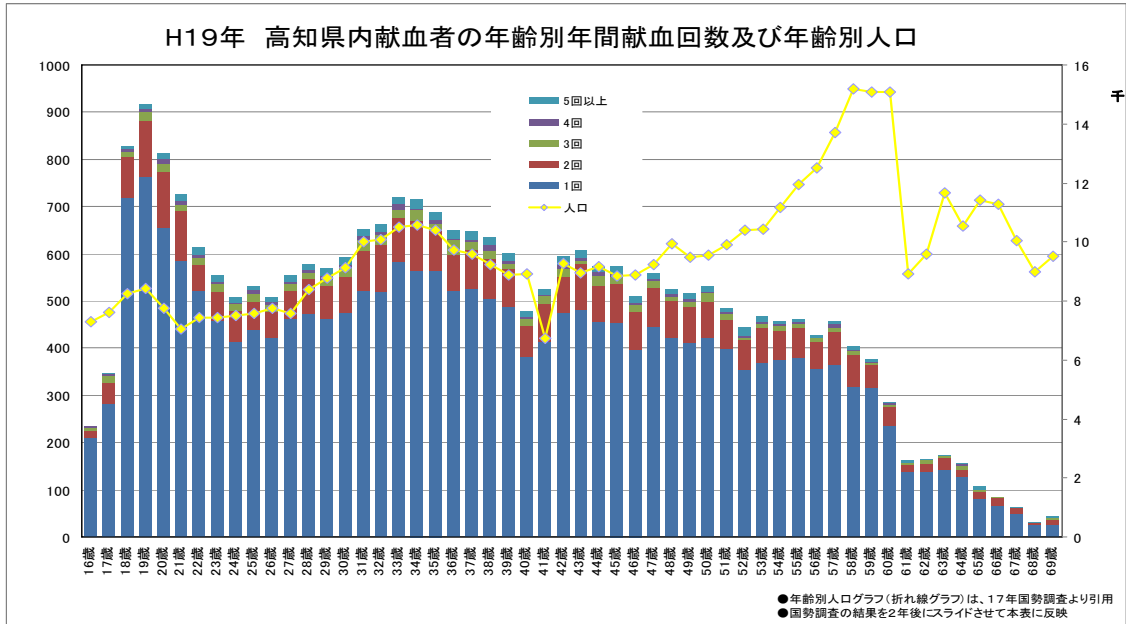
● 実献血者数分布と人口分布の比較

30代前半と59歳前後に人口分布のピークがある。献血者分布は19歳をピークに減少し、30代前半に緩やかな第二のピークが見られてからほぼ減少し続ける。



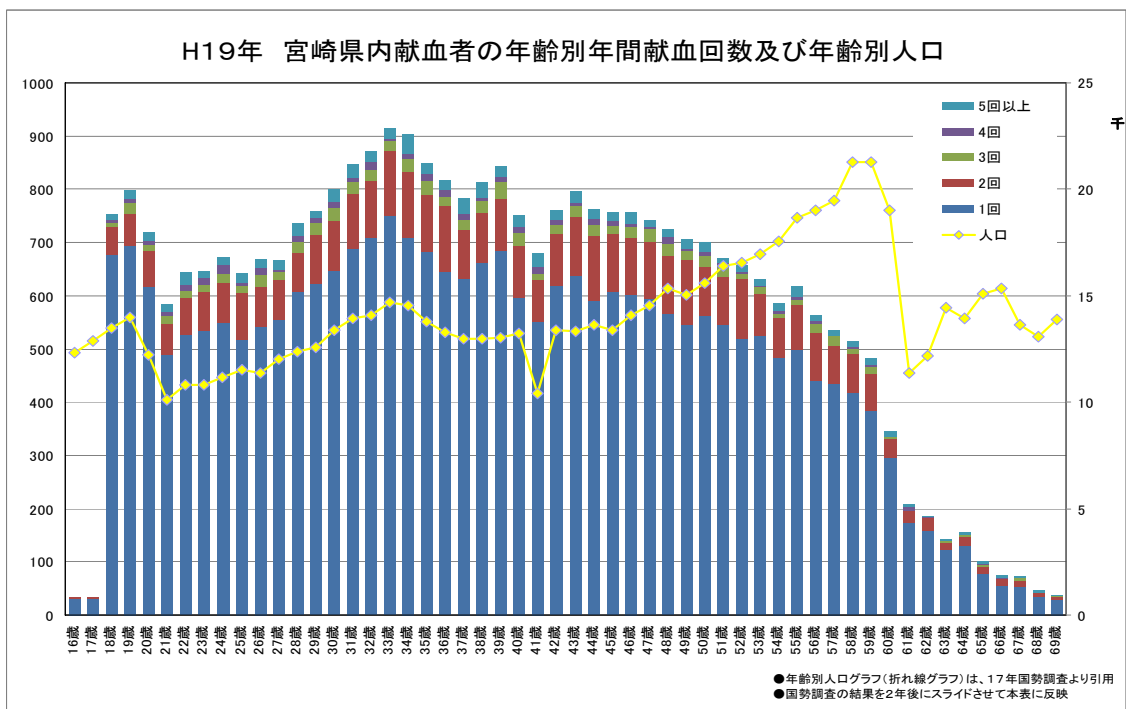
● 実献血者数分布と人口分布の比較

18～20歳の人口分布と比較すると献血者分布が多い。50～59歳の人口分布は上昇しているが、献血者分布は50～55歳まで緩やかに減少後、56～58歳までは緩やかに上昇している。



● 実献血者数分布と人口分布の比較

18、19歳の人口分布と比較すると献血者分布が多い。49～57歳の人口分布はほぼ上昇しているが献血者分布は減少している。

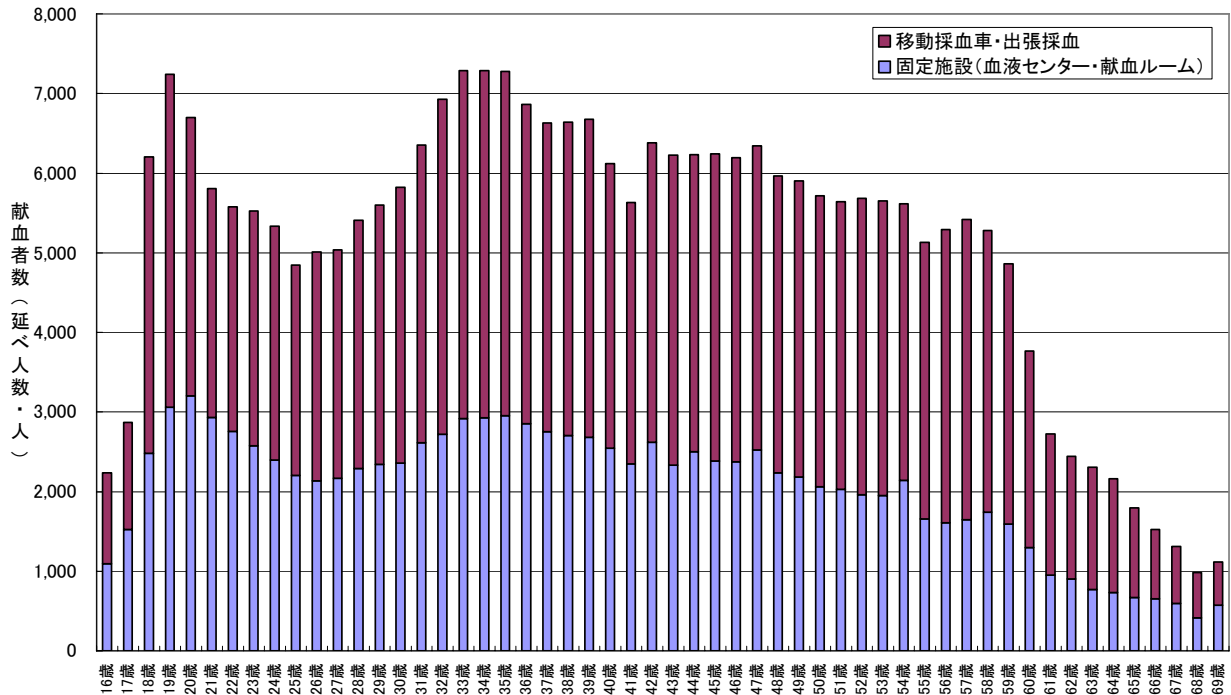


● 実献血者数分布と人口分布の比較

18、19歳の人口分布と比較すると献血者分布が多い。50～57歳の人口は上昇しているが、献血者の分布ほぼ減少している。

年齢・施設別延べ献血者グラフ【6都道府県抜粋】

H19年 北海道内の施設別献血者数



- 延べ総献血者数 276,823人

移動採血車・出張採血 166,157人（60.0%）

固定施設（血液センター・献血ルーム）110,644人（40.0%）

- 年齢別に見る施設別献血者数

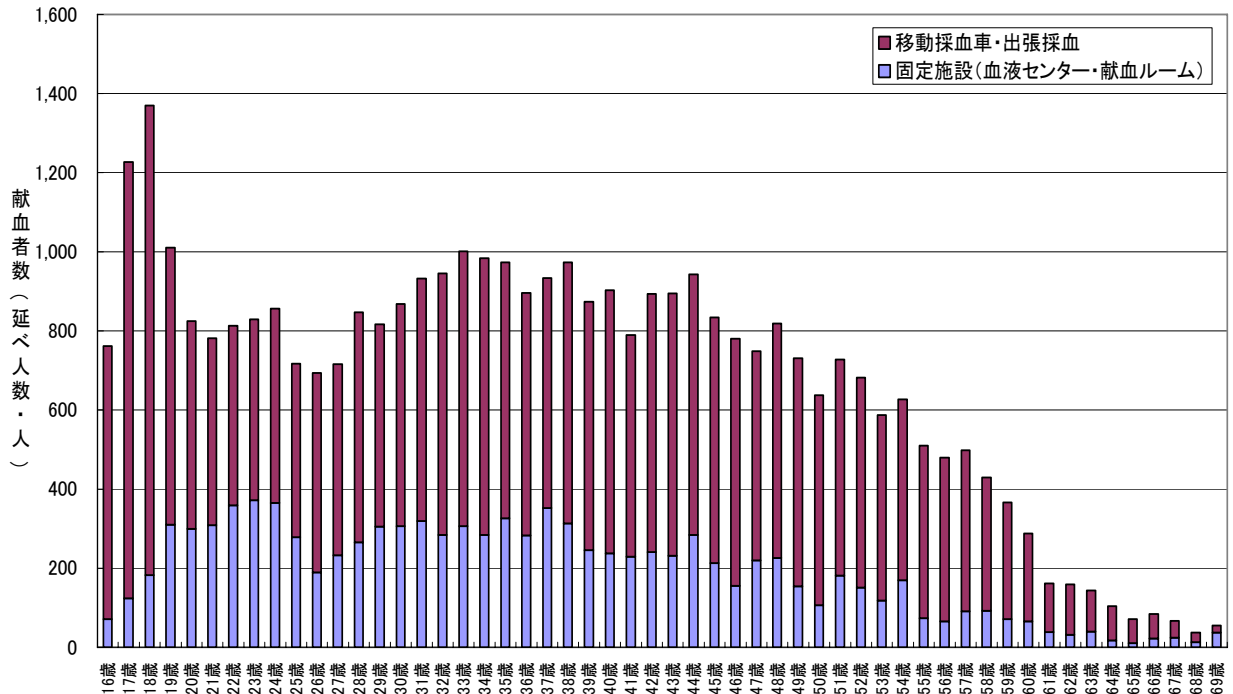
16～23歳は18、19歳を除き固定施設の割合がおおむね50%前後だが、18、19歳と20歳代後半～68歳は移動採血車・出張採血の割合が60～70%。

- 血液センター、献血ルーム数（平成20年4月1日現在）

血液センター：5カ所

献血ルーム：6カ所

H19年 山形県内の施設別献血者数



● 延べ献血者数 36,705人

移動採血車・出張採血 26,395人（71.9%）

固定施設（血液センター・献血ルーム）10,295人（28.1%）

● 年齢別に見る施設別献血者数

20歳代前半を除き、移動採血車・出張採血の割合が65～90%。

中でも16～18歳と50歳代後半～60歳代前半に移動採血車・出張採血の割合の高い年齢層（80～90%）が見られる。

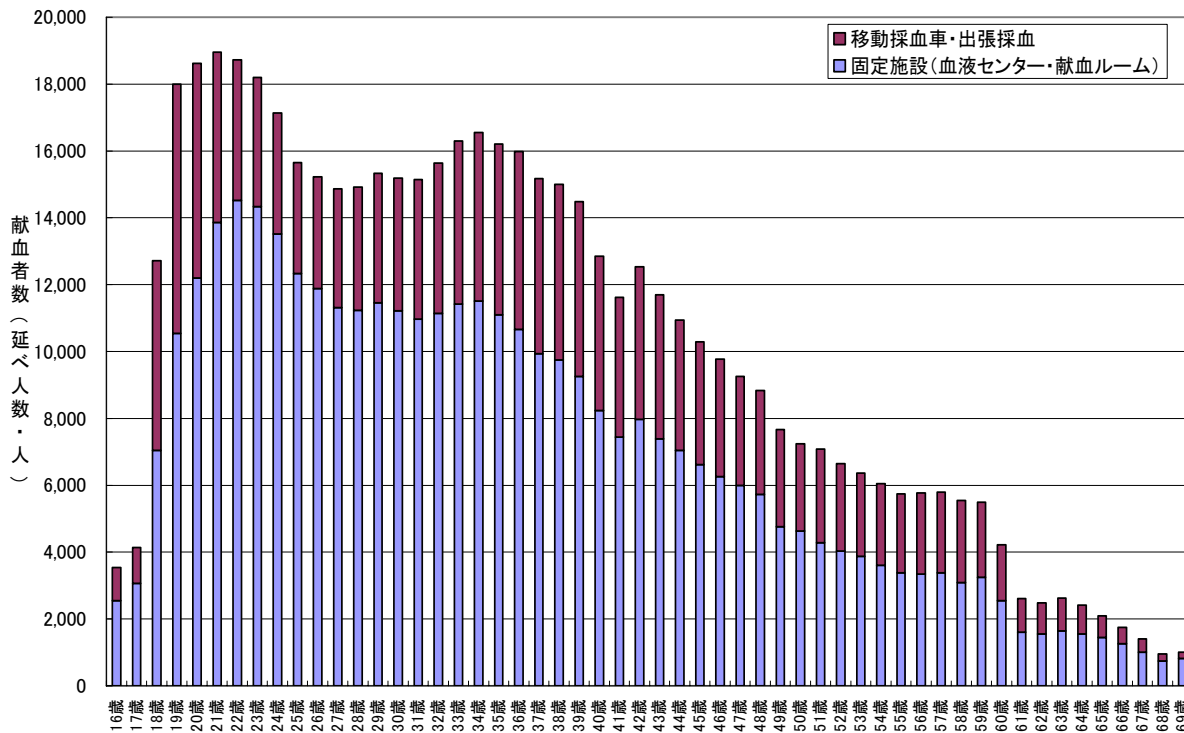
20～25歳は、他の年齢に比べて移動採血車・出張採血の割合が55～63%とやや低くなっている。

● 血液センター、献血ルーム数（平成20年4月1日現在）

血液センター：1カ所

献血ルーム：1カ所

H19年 東京都内の施設別献血者数



● 延べ献血者数 550, 525人

移動採血車・出張採血 175, 198人 (31.8%)

固定施設(血液センター・献血ルーム) 375, 291人 (68.2%)

● 年齢別に見る施設別献血者数

全年齢を通して固定施設の割合が55%を超えており、特に16、17歳、20歳代前半～30歳代前半、60歳代後半は固定施設の割合が70%超と高い。

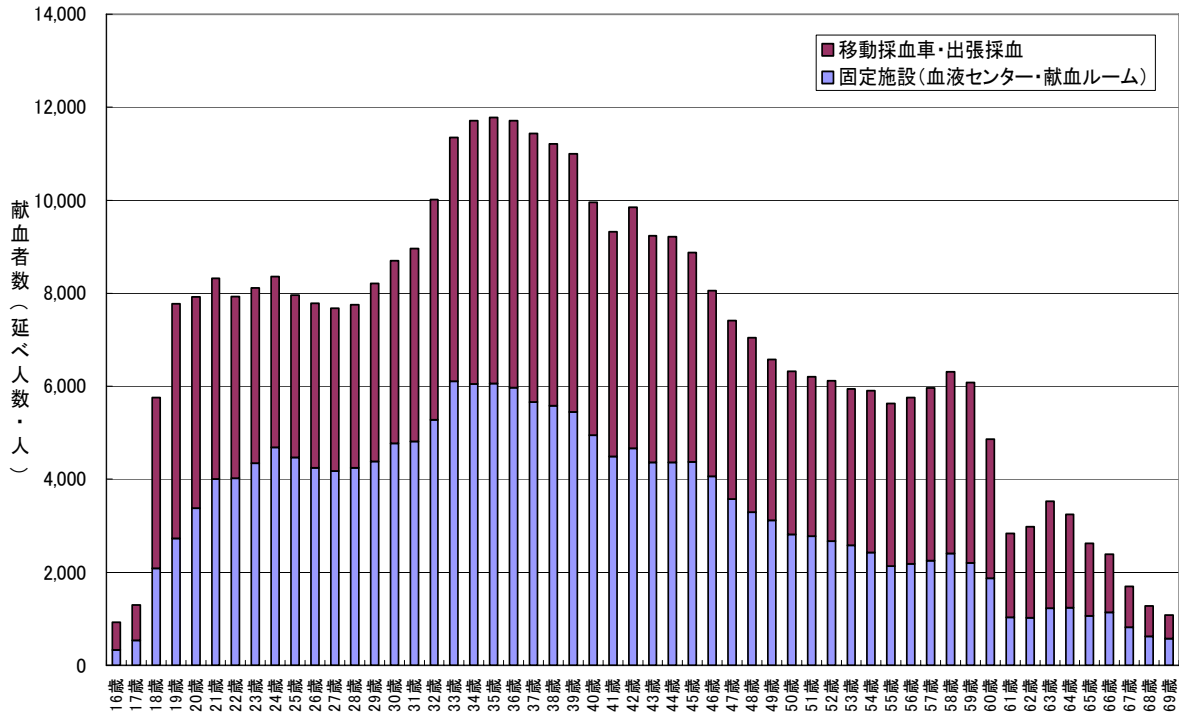
一方、18、19歳と50歳代後半は固定施設の割合が55～59%とやや低い。

● 血液センター、献血ルーム数(平成20年4月1日現在)

血液センター：2カ所

献血ルーム：12カ所

H19年 大阪府内の施設別献血者数



● 延べ献血者数 375,972人

移動採血車・出張採血 196,259人（52.2%）

固定施設（血液センター・献血ルーム）179,688人（47.8%）

● 年齢別に見る施設別献血者数

20歳代～30歳代前半と69歳は固定施設の割合が50～56%。

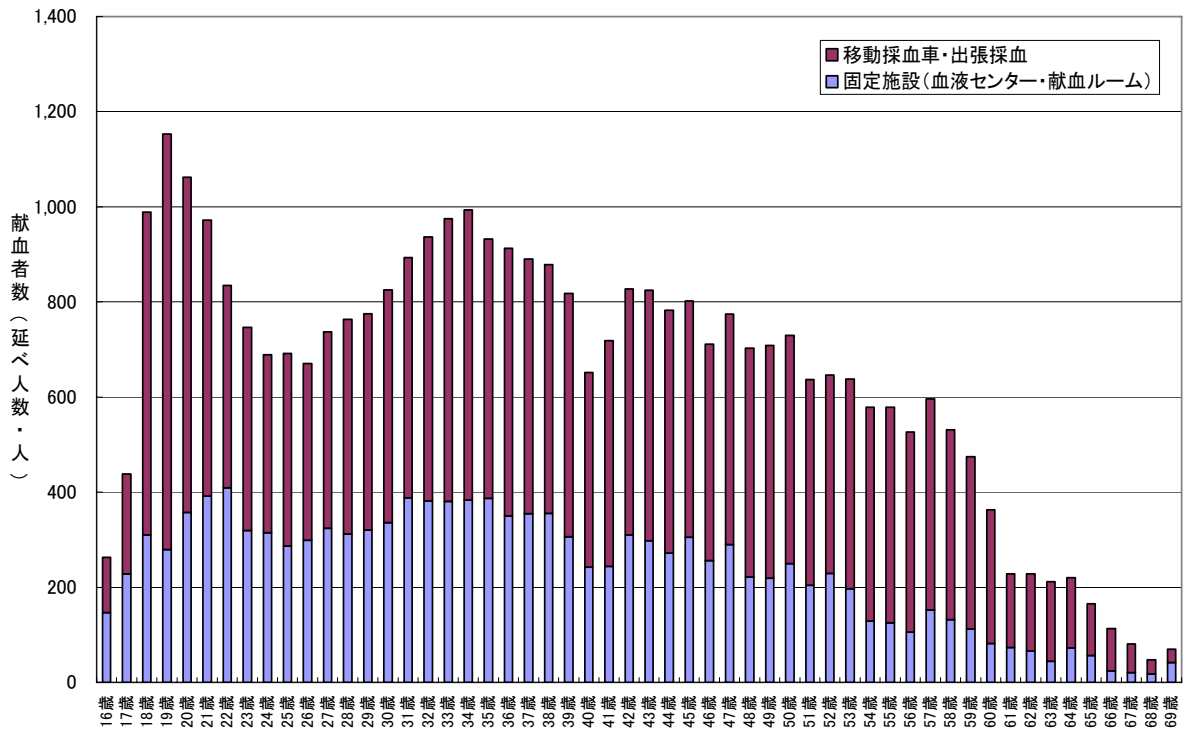
一方、16～19歳、50歳代後半～60歳代前半は、移動採血車・出張採血の割合が59～65%とやや高い。

● 血液センター、献血ルーム数（平成20年4月1日現在）

血液センター：3カ所

献血ルーム：9カ所

H19年 高知県内の施設別献血者数



● 延べ献血者数 35,021人

移動採血車・出張採血 22,287人(63.7%)

固定施設(血液センター・献血ルーム) 12,715人(36.3%)

● 年齢別に見る施設別献血者数

16、17、69歳で固定施設の割合が52～60%であることを除き、移動採血車・出張採血の割合が高い(おおむね60～70%代後半)。

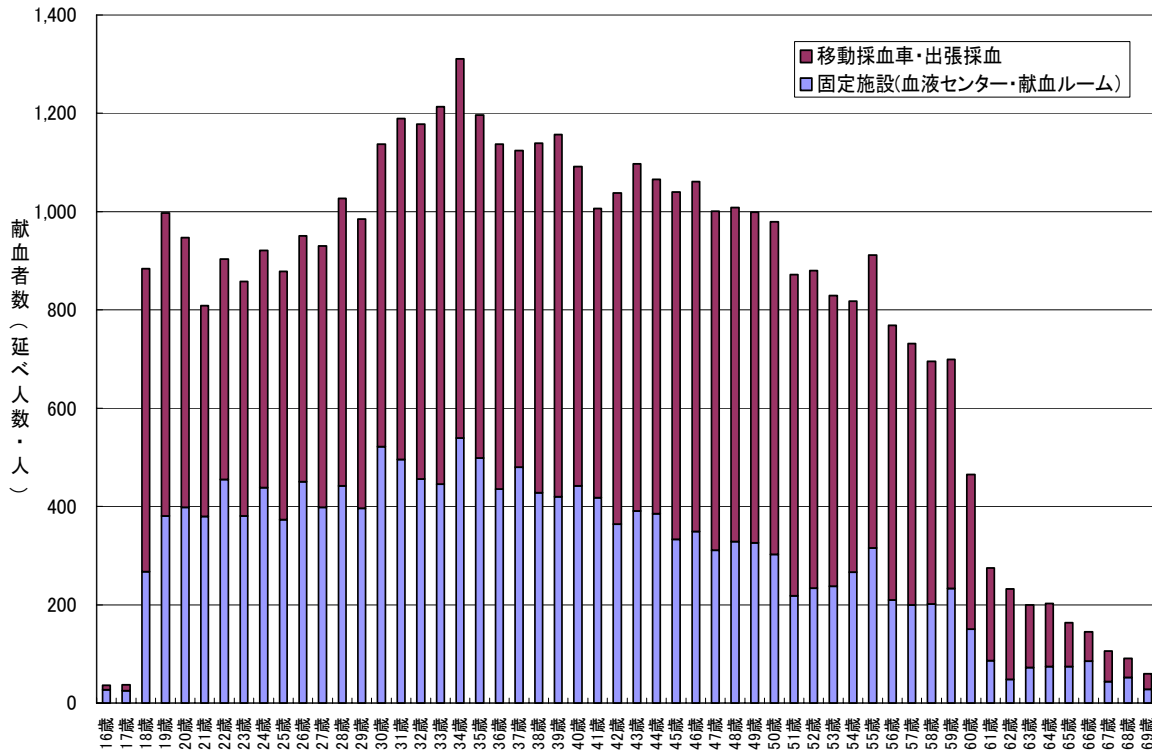
19歳と50歳代後半～60歳代後半にかけて、移動採血車・出張採血の割合が高い年齢層(74～79%)が見られる。

● 血液センター、献血ルーム数(平成20年4月1日現在)

血液センター：1カ所

献血ルーム：1カ所

H19年 宮崎県内の施設別献血者数



● 延べ献血者数 43, 497人

移動採血車・出張採血 27, 164人 (62.5%)

固定施設(血液センター・献血ルーム) 16, 312人 (37.5%)

● 年齢別に見る施設別献血者数

16歳、17歳で固定施設の割合が75.0%、67.6%と高いことを除き、特に50歳代から60歳代前半にかけて、移動採血車・出張採血の割合が高い年齢層(おおむね60~70%代後半)が見られる。

● 血液センター、献血ルーム数(平成20年4月1日現在)

血液センター: 1カ所

献血ルーム: 1カ所

わが国の採血基準

平成20年10月現在(平成11年最終改正)

項目	全血採血		成分採血	
	200mL全血	400mL全血	血漿	血小板
1回採血量	200mL	400mL	300mL~600mL (体重別)	400mL以下
年齢	注)16歳~69歳	注)18歳~69歳	注)18歳~69歳	18歳~54歳
体重	男性45kg以上 女性40kg以上	男女とも 50kg以上	男性45kg以上 女性40kg以上	
最高血圧	90mmHg以上			
血液比重等	血液比重1.052以上 又は血色素量 12g/dL以上	血液比重1.053以上 又は血色素量 12.5g/dL以上	血液比重1.052以上 又は血色素量 12g/dL以上 (赤血球指数が標準域 にある女性は11.5g/d L以上)	血液比重1.052以上 又は血色素量12g/dL 以上
血小板数	—	—	—	15万/μL以上 60万/μL以下
年間採血回数	男性6回以内 女性4回以内	男性3回以内 女性2回以内	血小板成分採血1回を2回分に換算して血漿成分 採血と合計で24回以内	
年間総採血量	200mL全血と400mL全血を合わせて 男性 1,200mL以内 女性 800mL以内		—	—
共通事項	次の者からは採血しない ①妊娠すると認められる者、又は過去6ヶ月以内に妊娠していたと認められる者 ②採血により悪化する恐れのある循環器系疾患、血液疾患その他の疾患にかかっていると認められる者 ③有熱者その他健康状態が不良であると認められる者			

注)65歳から69歳までの方は、60歳から64歳までの間に献血の経験がある方に限られる。

(採血の間隔)

前回の採血	全血採血		成分採血	
	200mL全血	400mL全血	血漿	注)血小板
200mL全血	男女とも4週間後の同じ曜日			
400mL全血	男性は12週間後、女性は16週間後の同じ曜日 から		男女とも8週間後の同じ曜日	
血漿成分採血	男女とも2週間後の同じ曜日			
血小板成分採血				

注)血漿を含まない場合には、1週間後に血小板成分採血が可能。ただし、4週間に4回実施した場合には次回までに4週間以上あける。

(平成20年度版血液事業報告より抜粋)